

MINAMATAは終わっていなかった

眞鍋由比

ジョニー・デップが水俣病の映画に出ると聞いたときは驚きました。私が子どものころ教科書に四大公害として載っていた話。けれど2021年のいまでも認定が進まず、1,600人以上の苦しんでいる人たちがいる。

1953年ごろから豊かな漁師町だった港のネコがいきなりけいれんをはじめて狂死します。工場排水にふくまれた有機水銀が海や川の魚介類を汚染して、それを食べたネコ、そして人間に中毒症状がでたのです。神経がおかされて、手足のしびれやふるえから、さらに手足の麻痺、視力障害、言語障害、意識混濁などのさまざまな重い症状があらわれるほか、胎児性の患者も生まれました。

ジョニー・デップが演じたのはユージン・スミス。米フォト・ジャーナリストで1918年生まれ。世界最大のニュース週刊誌「L I F E」スタッフとして太平洋戦争に従軍、沖縄戦取材で瀕死の傷を負いながら生還、戦後は「カントリー・ドクター」「助産婦モード・カレン」「慈悲の人シュバイツァー」と写真史に残る傑作を次々に世に送り、高度経済成長下の日本企業「日立」のレポート「東洋の巨人」を発表、遺作となったのは公害病「水俣病」を世界に知らしめた「M I N A M A T A」。

第1号の患者が認定されてから10年もたつのに認定も補償も進まず、工場側も県も国も責任を認めようとしない。そんな状態で病と、工場側とたたかう住民たちを3年、ユージンは水俣に住んで撮影し、発表しました。チッソの工場労働者に彼がひどく暴行されたことも事実。

この映画のベースになった写真集は、かなりショッキングで遺族の方の意向もあり、絶版になっていました。が、この映画を期に新版が最新の知見とともに出版されています。写真集の巻頭に、「過去の誤りをもって、未来に絶望しない人びとに捧げる」との一文があります。世界に向けて水俣病を発信した重要な作品集。

『水俣』W.ユージン・スミス、アイリーン・M・スミス共著 三一書房 1991

このなかで最も有名な「入浴する智子と母」を連想させる写真の撮影シーンは映画の後半に登場します。

映画のラストにはいまなお世界各国でつづいている人災・公害の事例が列举されています。ジョニー・デップは「（水俣でのことは）特別な人に起きているのではなく皆に起こりうる。今いる立場から、ちょっと視野を広げて想像力を働かせるきっかけになればいいと思う」とインタビューで語っています。

▽音楽＝坂本龍一▽出演＝ジョニー・デップ、真田広之、國村隼、美波、加瀬亮、浅野忠信、岩瀬晶子、ビル・ナイ

アンドリュー・レビタス監督は「50年前の事件だが、今も闘っている人がいるのは衝撃的。水俣だけではない。毎年次々と、環境汚染や無責任な企業の犠牲者が出ている。何百万人もの苦しんでいる人たちを代弁するために、この映画を作ったんだ。世界にはもっとユージン・スミスが必要だ。若い世代がこの映画を見て、世界で起きていること、闘いが続いていることを知り、次のユージンになってほしい。目的を持って諦めなければ、連帯することができるはずだ。芸術家には、観客を力づけ、情熱を育むような作品を提供する責任があると思う」。

ユージンは写真集の序文をこう結んでいます。「気づかせることがわれわれの唯一の強さである」

ユージンの児童むけ伝記『ユージン・スミス 楽園へのあゆみ』

土方正志著 偕成社 2006年

では映画では描ききれなかった優しく繊細で正義感あふれる彼の人生を知ることができます。

ユージンはネコ好きで、彼がひざに乗った愛猫とうたた寝している写真もあるそうです。映画のなかでも一瞬だけ彼の部屋にネコが映ります。亡くなったときもまいごになった猫のえさを買いに来て、発作で倒れたのでした。

